

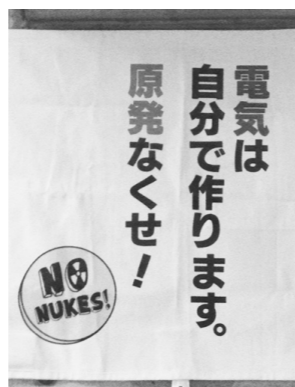
反原発！

「原発は社会悪であって、あってはならないもの」

こんな強い思いを持つ希望社代表桑原は、今“反原発”を方針の一つに掲げて、会社経営を進めています。

今年の夏期休暇には、原発についての書籍を読んでその感想文を提出するよう、社員に指示が出されました。

今号では、そんな桑原の思いと、それに係わる会社・社員の活動について紹介いたします。



社長室に掲示している幕 ▲

1. 反原発を掲げる

反原発を強く主張する当社代表桑原に、その思いを聞きました。

Q: どうして、会社として“反原発”を掲げるのですか？

原発というものは、例えば核のゴミの処理さえも決まらない。何百年だか何千年かわからないが、こういう負の財産を抱えて地球が存在する。これだけを捉えてみても、原発はあってはならんと強く思っている私がいて、その私が会社を経営しているからだ。

社員がこの方針をどう受け止めるかは自由だが、原発を受け入れて良いのか悪いのかくらい考えてほしいと思っている。それを通して、社員の変化と成長を期待し、見守っている。



今回、原発についての書籍を読むことを、社長として社員に義務付けた。社員が、原発の本を読むことを義務付けられているこんな会社は、日本中調べてみてもまず見当たらないと思う。

ただ、社員に対して、何も分からないまま原発反対と言え、などとは言っていない。さまざま

まな考えを持つ社員の自由を制限して、こうでなきゃならんということ求めているのではない。しかし、原発に関心も持たないような社員は希望社には不要だ。

社員の感想文を読んでも、「読んでみるまで知らなかった。読んでみたら、そうか、そういうことだったのかと思った」という素直な感想がとても多い。そして、「原発は夢のエネルギーではなく、とても危険なものであるということを知り、この問題に門外漢であるのではなく自分も行動しなければと思った」というような意見もたくさん生まれている。私の期待しているのは、こういう社員の変化だ。

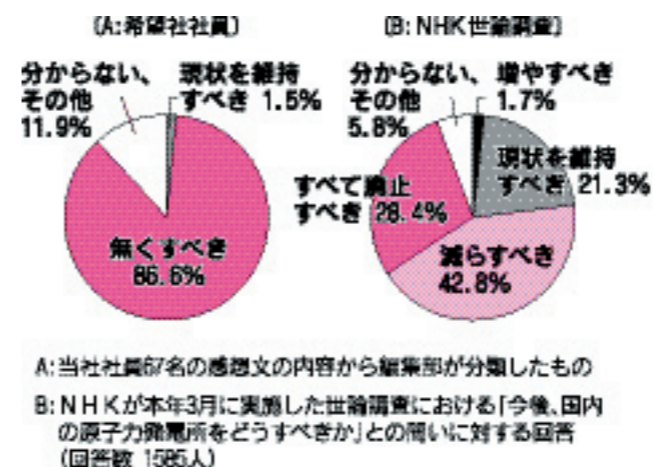
「自分が反原発を掲げる会社で働く」ということについて考えたり、原発反対の意思表示としてデモに参加したりする社員が育っていけばいいと思っている。

Q: 社員の感想文では、原発を無くすべきという意見が圧倒的でした。

※ P2 [グラフ 1] 参照

経営者が原発に反対している会社の社員だから。社長が政治家や官僚の言うことに抵抗しながら生きている人間だから、そこで働いている社員も影響を受けて、そういう結果が出たんだ。

[グラフ 1] 原発をどうすべきか



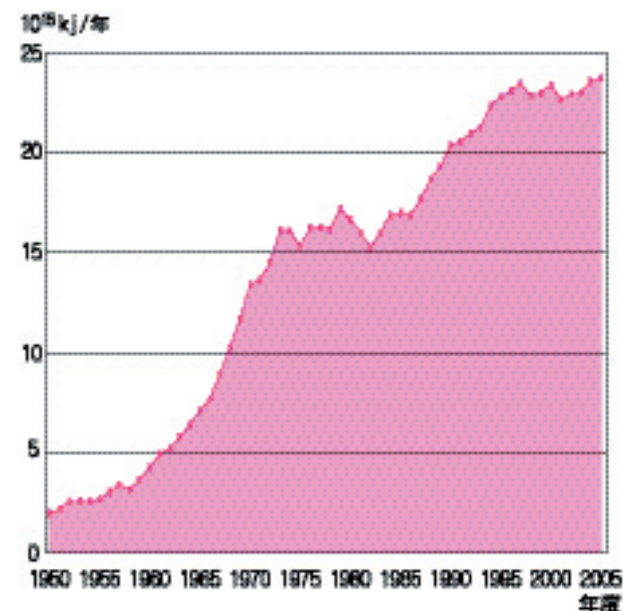
みんなが原発反対の本を読んだから、こういう傾向になったということもある。原発賛成の本も読めよと言ったんだが、賛成の本を読んでいる社員はそれほどいない。皆に呼びかけたからにはと、私も賛成の本を読み始めたが、くだらなくて読むに値しないと思って途中で止めた。

社員は「さまざまなことを知った」と書いているが、私も小出さんの本を読んで新しい発見をした。科学的なデータを基に「産業革命以後の急速なエネルギー消費量の拡大、20世紀後半の無制限のエネルギー消費が、環境に大きな影響を与え、さまざまな問題を作ってきた。日本のエネルギー消費量がこれまでの120年間と同じペースで増大していくならば、自然のバランスが崩れ、人は生き延びられなくなる。日本のエネルギー消費量は、高度成長期前の水準まで戻さなくてはいけない。」と言っていることなどだ。※ [グラフ 2] 参照

Q: 社長が“反原発”を掲げるようになった経緯は？

私は、戦中の治安維持法が存在する時代に、左翼運動をしていた両親の下に生まれた。小4のとき、学校の授業で将来何になりたいかと尋ね

[グラフ 2] 日本の一次エネルギー供給の長期推移 ※エネルギー・経済統計要覧 (2007年版) より



られて、革命家になりたいと答えた。現状を維持する政治家ではなく、社会を正面から否定して現状を打ち壊していく革命家になりたいと。こんなことが自分のベースにある。

20歳のとき、在職していた清水建設(株)で、日本初の営業炉となった東海村の原子力発電所の設計チームに配属され、図面を描かされた。なんだか知らんが厚い壁の建物だな、ものすごい量の鉄筋やコンクリートだな、と思っていただけで、もちろん、反原発なんて考えてもみない。原発というものを全く知らないんだから。

「原発はクリーンなエネルギー、事故は起きない安全なもの」という宣伝がなされて、庶民の中に定着していった。私もはじめは、原発が危険なものだとは思いつかなかったが、そのうち、貧しい農村や漁村に大量のカネを出すことで、日本中に原発が広がっていることがだんだん分かってきた。そして、今から30年位前に、広瀬隆という人が書いた『東京に原発を！』という本を読んだことで、原発はあってはいけないものだとはっきり意識するようになった。



数年前から「庶民による政治改革運動」を始めている。日常の煩雑さで役割を負えない自分があり、思うように進まないという現状を抱えているが、本当はもっともっと発展させていきたい。建築基準法再改正運動なんかもそうだけれど、政治を政治屋や官僚に任すのではなくて、国会の外で小さな運動を起して、声を作っていく。そういう流れのなかで、私の反原発という取り組みも出てきている。

この反原発運動はうんと大きくなると感じている。原発は、左翼・右翼・ノンポリ問わず大勢の人が批判している問題だからだ。政党政治が機能しなくなっている。その先がどうなるのか見えないが、一般庶民が直接政治に参加し意思表示をする、そういうものに反原発運動もつながっていく。

1960年の安保反対運動は国民的運動になった。大勢の人たちが全国からバスで乗り付けてきて国会を取り巻いた。それ以来日本には政治的な大運動はなかったが、反原発運動はこの安保反対運動に匹敵する運動になる。政治に関心のない人まで含めての大運動になると、政治にも変化が起き、政権が交代するなどによって運動は一旦終焉するだろうが、それでも反原発問題は安保問題と同様の火種を持ち続けると思っている。

Q: “反原発”とはどういうことですか？

福島第一原発の事故をきっかけに、今世の中で“脱原発”“原発の再稼働反対”といったことが話題になり、社会的風潮になっている。でもこれは本質的なことではない。核そのものが廃棄されなければならない、ということが重要なことで、原発問題はその一部だということだ。米ソの冷戦構造のなかで核兵器が無制限に作られてしまった。この大量に作られた核兵器が、これからずっと傷みもしないで静かに保管され

るなんて保証はどこにもない。原発を無くしても、地球上には、まだ大量の核兵器や核のゴミが残る。

まずは、核を作ること、核を使うことを、即刻やめなきゃいけない。これが基本だ。そして、これまで作ってきたものをどうやって始末していくか、核という悪魔をどう死滅させていくかが、これからの科学の課題だ。

その意味で、学問として核を研究する人材は今後ますます必要になってくる。これまでは、核を平和利用することはすばらしいことだという価値観に支えられて、これを学ぶ科学者がたくさん生まれたが、核は悪で廃棄すべきものだと言われたときに、それに取り組もうとする若者はうんと減ってしまうにちがいない。だから、核の処理ということも、とても困難を伴う問題だと思う。

Q: 希望社はこれまで、「庶民による政治改革運動」の一つとして電力エネルギーについての意見交流会をやったり、『原発のウソ（小出裕章著）』という本を全国の宿泊施設「ウィークリー翔」や岐阜・東京・大阪の事務所に置いて無料配布したりしてきましたが、今後はどのようなことをやっていこうと考えていますか？

私が何かやるというより、みんなで考えて作って欲しい。どういう集まりがあってもどういう交流があってもいい。勉強会を始めてみようということもとてもいいことだ。その中で積極的な人たちが周囲に呼びかけながら、どんなことができるかを会話する場が起こってくればよい。

全国各地で今、脱原発・再稼働反対のデモが行われている。国会前へ行けば、いろいろな人



が集まり声を上げている。それは誰もができることだ。若いころはよくデモに行ったが、さすがにこの何十年間は行っていなかった私が、今回は重い腰を上げて動いた。大勢の人が反対という行動に立ち上がっているわけだから、自分もその一人として行動する、それは私自身がしなければいけないことだと思って。そのときも、



一緒に行ける社員がいたら一緒に行こうと呼びかけたし、今後ももちろんそういう形で取り組んでいくつもりでいる。

今取り組んでいることで重要なことは、電気を買わない住宅を造っていることだ。国家は国民に節電を求めている。その徹底した形が電気を買わないということだ。

そのために太陽光発電を採用したが、世間で宣伝されている太陽光発電とは意味が違う。世間で言うのは“発電した余剰電力を電力会社に高く買ってもらい、電力会社の安い電力を買って使うことで、儲ける”というもので、そこには電力の消費を抑えるという考えは全くないからだ。

そうして、代替エネルギー買取りによって発生するコストを、電気料金に上乗せすることで処理するという、こんなまやかしが行われている。このような問題も、市民に対して明らかにさせたいという思いを持っているが、宣伝に踊らされている市民に理解してもらうのは、とても難しい。

私自身は、電気を買わない売らないと言いながら、太陽光発電をやりたいと言うお客さんに対しては、高く売って安く買って差益を得るといふ今のシステムを選ぶことは当然ですよ、と言っているのが現実だ。

メガソーラー（大規模太陽光発電）というものが話題になっているが、あんなものをやった

ら大変なことだ。自分の家で使う分の電力を太陽光でつくるのはいいが、一つの村、一つの草原が太陽光パネルで埋め尽くされることを考えると恐ろしい。これこそ、資本主義経済の終末、墓場だ。だが、今世間にはそんな会話もない。ただただ代替エネルギーが必要だと言っている。

電気を買わないこと、そして電力消費を極力抑えるということが大切だ。そうして、規制緩和して発電を自由化すれば、電力の供給不足は起きない。このことが国民の中に理解され定着することを願いながら、「中電（中部電力）無用住宅」の実験を始めている。

2. 原発に関する本を読む

前章で触れたとおり、希望社社員は、この夏期休暇に原発に関する書籍を読み、感想文を提出しました。

ここでは、そのうちの代表的な一編と、その他の感想をご紹介します。

[表] 社員が感想を書いた書籍例

タイトル	著者	出版社
原発のウソ	小出裕章	扶桑社
日本のエネルギー、これからどうすればいいの？	小出裕章	平凡社
騙されたあなたにも責任がある 脱原発の真実	小出裕章	幻冬舎
市民科学者として生きる	高木仁三郎	岩波書店
東京に原発を！	広瀬隆	集英社
原発列島に行く	鎌田慧	集英社
原発ジブシー	堀江邦夫	現代書館
偽善エネルギー	武田邦彦	幻冬社
脱原子力社会へ	長谷川公一	岩波書店
それでも日本は原発を止められない	山名元・森本敏・中野剛志	産経新聞出版

『原発のウソ』小出裕章著 読書感想文

山本晶代

まず、結論からすると、原発はゼロにすべきだというのが私の考えです。

3.11以降、原発事故やそれに関する事については、それなりですが関心を持ってきました。福島状況や政府や東電の対応だけを見ても、原子力に詳しくなくとも原発はなくなしたほうが良いと思いました。

原発に関わって生計を立てている人がいるし、原発に絡む利権などで原発を推進したいのは想像できますが、あの状況を経験しながら原発をやめようとならないのは非常に利己的な考えが強いのではないのでしょうか。

小出氏は著書の中で、電力が不足しても原発はゼロにすべきだというようなことを書いています。ただ、私は電力不足の関係から原発ゼロに向けての長期の移行期が必要ではないのか？と、この夏を経験するまでは思っていません。でも、ここ1年半、民間や個人レベルでの取り組みなどを見て、現時点ですぐにでも「電力不足ない原発ゼロ」は可能なのではと感じています。

また、原発を続ける限り「核のゴミ」が出続けます。その「核のゴミ」の処分方法を明確にせずに原発が開始されたと聞きました。小出裕章氏は以前テレビで「核のゴミ」を地下200mに埋めるという内容について、「地下200mに埋めて、200年後300年後大丈夫だということが科学的に証明されていないのだからすべきでない」と言われていました

が、本当にそうだと思うのです。“自分たちに直接被害がなければ後のことは知らない”、“危険だと知りながら、自分が得するために他の犠牲は気にしない” こんなことは決して容認してはいけなと思う。

それに、今回の福島の原発事故でどれだけの人体被害があるのかないのか、たくさんの科学者がいながら明確な答えはなく、ほとんどが憶測でしかないように思えます。

科学者が数値を持って説明しても、また別の科学者がそれに反論したり、違うことをいう中で結局わからないのだと思いました。

事故調査の結果、今回の福島の事故は人災だったと言われる中で、アインシュタインが過去に言い残した【原子力は人間の手に負えなくなる】という言葉を感じます。

人間は原子力を手放すべきです。人間にはとても扱えるものではなかったのだと認識すべきです。

昔、原発の近くを通過して「原発って本当に安全なのかな？日本だからきっと安全にしているんだろうな」って思ったのですが、この1年半でそれが根底から覆えられました。

安全も平和も自分たちが主体的に守っていくものだったんだと今は思います。大切なのは、今回の事故を教訓に、どのような未来にしていくなのだと思いますので。

このような想いを日々の生活の中に反映していきたいと思います。

さまざまな感想

■ 原発について自分はほとんど何も知らなかった。ニュースなどの断片的な情報のみで何となく危険と感じ、雰囲気賛成か反対かといえば反対か、という状態に近かった。本を読み、近くの原発で事故が起きればただ事では済まされないはずだし、事故が起きなくても使用済核燃料の処理その他多くの問題を先送りして、自分たちの子供にこれ以上の負担を残したり増やしたりしてはいけないと強く感じた。自分の問題と捉えて継続して学習し、自分ができる行動を起こすことが必要で、決して傍観してはいけないと思った。[平野誠]

■ 原発を除いた日本のエネルギー自給率は、わずか4%しかない。化石燃料の輸入先である中東の政情不安、中国・台湾との関係がシーレーンの安全性に及ぼす影響、原油価格高騰などのリスクやCO₂の増加などを考えると、本当に原発を止め今後も化石燃料に重点を置いて大丈夫なのか疑問だ。産業構造を根本から変え、耐震性を高めるという前提であれば、今後も原発は30～40%の割合で稼働していくべきだと思う。[朝倉勝志]

■ 脱原発は環境問題そのもの。原発はもとより火力・水力の時代も終わりだ。火力は化石燃料採掘で地球を傷つけ、大気汚染・温暖化の元凶となっている。水力はダムを造り生態系を破壊してきた。これからは、太陽系の中の水惑星地球とその大自然の一構成員である人間が、太陽の恵み（光・熱・風…）と母なる大地・大海からの恵みに深く感謝し、その恵みを享受していく時代となっていく。[内藤光明]

■ 原発事故の起こる前は「原発は、管理さえ上手くすれば環境に害も少なく、多くのエネルギーを得られる」というぼんやりとしたイメージでいた。その後「原発のウソ」を読んで原発のリスクを知ると、途端に「原発は恐ろしいもので徐々になくしていくべき」と思うようになった。今回原発賛成派の本を読み、情けなくも、原発はあったほうがいいのか、なくすべきかわからなくなってしまった。しかし、本1冊を読んで反対と思っていたときよりは、原発問題の見方が広がってよかったと思う。[原大軌]

■ 『原発のウソ』を読むまでは、脱原発に反対だった。チェルノブイリや東海村の事故についても調べていて、その壮絶さや原発の危険性も知っていたが、それでも脱原発に反対だった。しかし、この本を読んで、

自分が原子力・火力・水力等の発電割合といった初歩的なことも知らず、原子力が半分以上を占めていると思込んでいたことが分かった。また、電力は火力で賄えるのに原発が作られていた事に驚いた。今では、原発を廃止し、原子力に頼らない発電にシフトできる可能性があると考えられるようになった。[根木みゆき]

3. 読書会をはじめ

社員の読書感想文を読んだ桑原は、今後も引き続き原発についての学習をしていきたいと考え、社内で読書会を開くことにしました。

課題図書は、小出裕章著『日本のエネルギー、これからどうすればいいの？』（平凡社）。すでに多くの書籍で原発の危険性や問題点を主張している著者が、「脱原発よりも大切なこととは？」と問いかけ、「私たち一人一人が、エネルギーを大量につくって大量に消費するというこれまでの社会のあり方を見直し、エネルギー浪費型の社会構造を変えていかなければならない」と訴える内容の書物です。

「電気を買わないこと、電力消費を極力抑えることが大切だ」と言ってきた桑原にとって、とても参考になる内容であったこと、[中学生の質問箱]というシリーズのひとつとしてとても平易に書かれており、本を読むことが苦手な人も手に取りやすいものであったことから、この書籍が選ばれました。

10月31日に1回目の読書会を開きました。桑原と6名の有志社員が集まって、第1章の読み合わせ



を行い、わからない語句を尋ねあったり、感想を述べたりしました。また、原発事故後の日本の状況についての意見交流も行いました。

この読書会は、これからも月に2回程度開催していく予定です。